動物分類学会の創立に関した見聞録

Some Notes on the Founding of the Japanese Society of Systematic Zoology

鈴木 貴

Minoru Sudzuki

はじめに

本稿では、黎明期の動物分類学会に関する見聞のうち、特に創立の経緯について紹介したい。因みに本学会の名称は「動物分類学会」という和文表記で発足したため、本稿では、日本という2文字が入ることをお含みお書きいただき、その2文字が加えられたのは極めて最近のこと、英文表記に「Japanese Society of Systematic Zoology」が使用されているというのが主な理由であった、と記憶している。なお本稿において、引用の箇所以外は敬称や敬語を不用とさせて頂いた、また老化のため記憶違いもありうるので、ご教示願えれば幸いです。


ところで、これらの学会では当時も現在でも（会長級の人たちを除けば）、殆どの学会が何故か「動物学会」には入会していない。これに反し「動物分類学会」では、発足当時、義理で入会した人たちは除けば、ほぼ100% 近い会員が「動物学会」に入会しており、今も今に及んでいる。このことは、分類学会とその会員は、当初から「動物学会」と密接な関係があった、ということを示している。事実、分類学会は飛の鰭を介し動物学会から常に何かを吸収してきており、創立やシンポジウム開催の時期から学会役員の割振りまで、すべてが動物学会の動態に基づいたものになってしまっていたのである。このことは黎明期の分類学会を知る上で極めて重要なことなので、本文に入る前に、先ずこの点を記しておく。

創立の目的—その1

1949年2月12日に開催された動物学会定例評議員会において、以下のことが決定された（日本動物学会, 1949）。

1）「科学研究費の配分審査」に関しては、今後、動物学関係は学術委員会から動物学会に委任されることになった。

2）査定委員は動物学会から全評議員の18名、遺伝学会と昆虫学会から各2名、鳥学会、貝類学会、生物地理学会、陸水学会から各1名、これ以外に学術委員会から1名（駒井卓）の合計27名とする。

この時点で宮地伝三郎（生態）と内田（分類）は、自分の専攻分野に伏せず学会が創立していないため査定委員の割当てがなく、この状況では生物学同好の士が研究費を受けるのは極めて不利な立場に放置されてしまう、という危惧の念を持ったのである。

創立の目的—その2

内田には戦後初の動物学会（1948年10月、札幌）でDon J. Pletsch (GHQ) と議論している。次のような構想があった、「～多くの大学から分類学の講座や講義を解体されてしまった現在で、
分類学を維持させ後継者を育成するには、それを補完しうる機能を備えた「自然史博物館（仮称）」を新設する必要がある〜”

いっぽう、江崎悌三には「模式標本の保存問題（詳細に関しては会議報告第1〜2号を参照）」を解決したいという願望があった。とはいえ、この2点を叶えるには個人ではなく「学会」という団体から日本学術会議に答申するのがベストであることは、評議員であらかじめ知っていたのである。つまり内田と江崎は、分類学会を創立させた二人の希望は一石二鳥的に叶えられる、と考えたのである。

■ 最初の集会について

集会を1950年10月9日に設定した理由

「学会」を創立させるために同学同好の士を最も早く招集できる「時と所」は、次期動物学会大会（名古屋）の専門別総合講演会に予定された日時と場所以外にはない。実は、これが1950年10月9日の第2会場だったのである。事実、動物学雑誌（1951）には、以下のような記載がある。

「同時刻第2会場では、宮地伝三郎を発起人とする生態学懇談会、午後二時半から江崎悌三、内田亨両氏をそれぞれ発起人とする分類形態学懇談会及び分類学会の合同の集会が行われ、それぞれ専門家同志の顕著な懇談と報告が行われた。」

この第2会場で開催された2つの集会というのは、厳密に言えば、生態学関係が09:30〜14:20の時間帯で、分類学関係は（生態学関係の集会が延長されたため）14:40〜17:00の時間帯であった。目的は共に「学会」を創立させることを目標としていたのであるが、前記した通りである。この事実は、内田（1979）の「日本動物学会100年の歩み」という名の一覧表に、「1953年「日本生態学会」が創立」という項目があることからも明白である。これに対し「1950年「動物分類学会」が創立」という項目がない点については最後に触れることとなる。

ところで、この「大会記事」の中には奇妙なことに「創立」「発足」という単語が何処にもない。従って、これだけの記載では、学会が持たれたこととは事実であるとしても、それが分類学会の創立を目的としたものであると確証は、まったくない。

あれほど一貫した高島春雄自身も（当該集会には、自ら司会者兼務務作事の立場で参加していたにも拘らず）、いつも異なり、何故か参会者名や創立の状況を会務報告に全く記載していないのである。

■ 集会の内容－その1（動物学者の退席）

本件に関し唯一筆者が関与していることは、1）分類学会がいよいよ創立することになり、そのための集会が名古屋で開催されるという知らせがあったこと、2）加藤光次郎（筆者の恩師）に会席を手渡し会席を託したこと、3）学習会後、「期待外れで、とてもそんな状態ではなかったので多くの同僚と共に途中で退席した」と理由で、入会会が返却された、という事実である。この集会の内容に関しては、最後まで退席しなかった動物学者（昆虫学者を除く）が殆どいなかったこと、例外的に居残っていた山田真 iarwo（2003、私信）でさえ“50年以上も前のことなので、記憶していない”とのことで、真相は不明のままである。

■ 集会の内容－その2（シナリオの推定）

当日の司会者である高島は、青年にわたり豐富な経験から次のような想定をしたものと思われる。1）分類学者で「分類学会の創立」とに賛成しない人などはいないはずがない、2）分類学者で内田の議案「自然史博物館の設立」に反対する人などはいないはずがない、3）多くの動物学者は江崎の議案「模式標本の保存」には関心が薄い、4）江崎は音に聞こえた多弁家である。そこで、重要事項の説明終了時まで参会者をなんとか退席させない方法としては、江崎を最初のスピーカーとするのがベストであると。要するに、当日の最重要課題は“分類学会”の名で“模式標本の保存”と「自然史博物館の設立」という二つの問題を学会会議に答申することにあったので、その点に関する参会者の理解と協力を取り付けることをばかりに焦点を合わせながら、シナリオを作成してしまったのである。

いっぽう、“研究対象である動物群に未だ学会がない”という多くの動物学者たち（加藤など）は、以前から“戦後の混乱も収まったので、さらなる全動物群を研究対象とした「動物分類学会 s.atr」を全国規模で創立させるべき時期が来た”と誰もが呼び
かけを待ち望んでいたのである。そのような折に、
“動物分類学会”を立ち上げる”というので 20～30
名 (名古屋大会での講演者名から推定) が駆け集じ
た訳である。従って彼らにとっての最重要課題は
学会創立の必要性、「命名規約改正」と「模式標
本」に関する冗長な講演を傾聴することではなく
一刻も早く「入会手続」を済ませ、その後は場所を
変え、戦時中から交信が途絶えていた親しい同僚
と、少しでも長く懇談をしたかったのである。その
ため、殆ど関係なくことばかりに貴重な時間が費や
され一方に終わりが見えない現状に耐えかねて
“命名規約”などの問題は日を改めて博物館を中心
に検討されしよる“答申原案”作りなどという
事務的なことは分類学者には馴染まないから高島氏
に一任すべきである”などと嘆き合いながら、グ
ループ単位で早々と退席してしまったのである。
「研究費」や「自然史博物館」の問題は、分類学の発
展にしらべるメリットがあっても、それを学会創立の理由
としたことにも、当時の動物学者は心証を害したこ
とであろう。

結果として、高島は参審者の名を明記できなかっ
たばかりでなく、2 年近くで「動物学研究連絡委員
会」や「総合討論会＝分類学会シンポジウム」を欠
席するほどのショックを受ってしまったのである。

学術会議への答申と学会届の提出

高島によれば、‘‘模式標本の保存’と‘‘自然史博物
館’に関する答申の原案は、江崎、内田が動物学会
の評議員会に出席するため上京してきた折に作成
され、シナリオ通り「分類学会」の名で、1951 年 2
月 26 日には学術会議の宮地に提出されたという。
事実、動物学会広島大会の前日、すなわち 1951 年
10 月 10 日、教育研究所会議室で開催された日本学
術会議動物学研究連絡委員会において、委員長（宮
地）から「タイプ標本未保存」「自然科学博物
館の設置」などに関する報告の後、学術会議への
申入れ事項が審議された、という記録がある（動物
学雑誌 1952）。

分類学会会務報告第 1 号 (1951) によれば、その 2
日後である 2 月 28 日に高島、江崎と内田のトリオ
は急遽、在京幹事を招待して第 1 回幹事会を開催。

“ここで初めて‘‘動物分類学会則’の原案を作成し
た”と記してある。そして、4 月 16 日に高島は「学
会届」を文部省に提出。この原案は 10 月 13 日、動
物学会広島大会に付随して開催された専門別総合討
論会（分類学会ではこれが第 1 回総会とシンポジウ
ムに該当）で、承認されたのである。

入会申込みの状態

会務報告第 1 号によれば、‘‘先般‘‘動物学雑誌’に
広告を出しましたが、それによる入会申込者を誠に
寥々とするもので失望しておりましたところ、広島で
の本会総会が近づくにつれ入会申込者が相次ぎまし
た、けれども 11 月 22 日現在でまだ 168 名に過ぎま
せん。動物学関係 2 級の学会としての実を具えるた
めには 250 名にまで満溢を促す実のところ分類学
者で入会手続きをささまっておらぬ方が未だ相当あ
ります。どうか同学同好の士に入会をお勧めください。
専門の分類学者でなくても少しも差し支えないの
ですので（以下略）。そして、酒井恒、朝比奈正二郎
が一人で多数の方々を入会させた、と記してある。

入会申込者が少なかった第一の原因は、動物学雑
誌に掲載したという「広告」が、人目に触れなかっ
たからである。何故なら、筆者自身で 3 回、他人に
も依頼して 1 回ずつ探したが、「広告」は遂に見出せ
ず、掲載されたのではないか、とすら思えたからであ
ら、第二の理由は、10 月 9 日の集会内容か
ら、「分類学会」が“期待はずれ”と誤解されてしま
ったためと思われる。因みに、1952 年から入会者
（加藤や筆者を含む）が急激に増えたのは、加藤によ
れば、内田の説得によるものである、という。

おわりに

「創立日」の判定に関しては、「学会届が受理され
た日」と看做すのが普通であるが、当時は「届出制」
であった。しかし「総会で承認された日」という考
えもある、こうした点に関し無視できないのは、動
物学雑誌 (1951) の文面 (前記) である。そこには
“主に昆虫の分類形態を専門とするグループからな
る「分類形態学懇談会（代表＝江崎）と主に北海道
在住の分類学者の集まりである「分類学会（代表＝

ダクサ No.19(2005) ■ 81
内田）が合同で会合を持ち～”と記述されている。そのため「分類学会」は既に北海道で発足していたことになり、「東京動物学会」が発展解消して「日本動物学会」と名称を変更したケースと同じ扱いが可能になる。そうなると、札幌で「分類学会」が発足した年月日が、分類学会の創立日と看做すべきであるとの考えも成立する。

この点に関し山田真弓（2003、私信）は、「1950年以前に、内田亨が北大動物学教室関係を中核に「動物分類学会」を創立していた、という確固たる資料は見当たらない」という。この他「東京生物学」も含め、従前の学会は創立が概ね教室内の話し会やゼミに起因を持つので「趣意書」の配布、「準備委員会」を設立しての検討といった手順をまったく踏んでいないという事実も見逃せない。

“内田（1979）の一覧表に1950年動物分類学会創立という項目がない”、“この点に関する実島の記述が明確ではない”のとは、実は、こうした複雑な事情を踏まえてのことなのであろう。

■ 引用文献
日本動物学会 1951. 第21回大会記事。動物学雑誌 60 (1・2): 1-2.
東京大学総合研究資料館、1979. 日本における動物学の歩み展、1-8.

（受付：2005年2月2日）
（受理：2005年3月14日）